教育資料室だより

No.23　令和6(2024).3.1
発行　桐生市教育資料室
桐生市小曽根町1－9（西小学校内）
電話･FAX　0277(43)3171

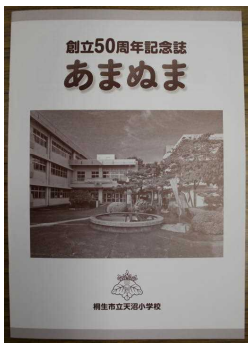
桐生の教育史をたどる【特別編】

小学校開校150周年

桐生学校(＝現在の北小学校)ができたのは、学制発布の翌年、明治６年(1873)10月７日でした。19日には新宿村に新宿学校(＝南小学校)が開校、廣沢村には廣教舎(＝広沢小･･･桐生学校よりも２日早い10月５日)が、翌７年１月16日には安楽土学校(＝東小･西小)、同17日に境野学校(＝境野小)など、周辺の村々を含めて、次々と小学校が誕生しました。

梅田南小
桐生学校第二分校として
1873.11.27開校

旧黒保根村では、明治６年２月に当時の水沼･上田沢･下田沢･宿廻･神梅村が連合して、群馬県で２番目の小学校として水沼学校を創設、旧新里村でも同年８月、武井･大久保･高泉･鶴ヶ谷･奥沢村が連合し、武井小学校(＝新里中央小)が開校しています。



天沼小 創立50周年
1973.4.1開校

つまり、昨年2023年から今年2024年にかけては、桐生市の多くの小学校が創立150年を迎えた(迎える)ということです。そして偶然なのか必然なのか、昨年は150周年に合わせたかのように、忘れられていた、或いは初めて耳にしたという品物の発見や出来事の知らせが３校で相次ぎました。新聞等でも紹介されていますが、今回は、これらの不思議発見物語を中心として構成しました。

各校の記念式典や記念行事については、新聞で報道されたり、学校ＨＰにその様子が紹介されていたりする学校もございますので、そちらもご覧ください。創立の新しい天沼小も50周年を迎えました。５年後には、神明小(1979.4.1開校)が続きます。

☆資料提供協力　東小学校　西小学校　境野小学校
梅田南小学校　天沼小学校

昭和17年夏 ある少年の絵日記　東小学校

３枚の写真は昭和17年(1942)の夏、東国民学校の６年生だった竹下禎祐さんが描いた『繪日記』(全10カット)です。この絵を東小へ持ち込んだのは、東国民学校の教員だった東使兵四郎さん(後の第４代昭和中学校長)の孫に当たる東松山市在住の小島さん。桐生タイムス紙に連載されている「学びのモノがたりNo.46＝(東国民学校の)当宿直日誌Ⅰ」(2022.8.10)の写真に祖父の筆跡を見つけたことをきっかけに、遺品の中に眠っていた『繪日記』を寄贈してくれました。

受け取った『繪日記』は経年劣化しており、令和４年度の東小学校長が元ＰＴＡ会長に相談したところ、書道教室を開く義母様を介して表装されることとなります。そして令和５年３月に完成したのが右の絵巻物です。７月25日「明日から夏休み」から始まり、陸上大会出場、プールで遊ぶ、畑作業、東京旅行、創案品完成、８月26日「鍛錬期間で鍛えた體だ!!胸を張って学校へ」最後は満月を描き「蟲の音に讀書したしむ秋近し」と結ばれています。

竹下さんの長女鶴谷さんの話によると「禎祐さんは絵が好きで、近くのシマ画廊によく出かけ、上野の美術館にも連れて行ってもらった思い出がある。竹下さんの父は紋章上絵の職人をしていたから絵心を継いだのかも」とも。韋駄天といわれるほど足が速く、桐高在学時代には国体に出場したこともあるそうです。陸上六種の選手として優勝したのは、７月30日のことでした。

児童生徒の作品は、返却することが通常ですので、この作品をどんな理由で東使先生が所持し、保管されていたのか、今となっては分かりません。ですが、創立150周年に合わせるかのように見つかった昭和17年の作品が、善意の人の輪を経て、令和の時代を生きる私たちの前に姿を現したのは、何かの導きがあったということなのでしょう。［東小学校長談話をもとに構成］

☆参考　桐生タイムス　2023.5.16　　2023.6.1

50年前のカプセルから25年前の品物が出現　西小学校

令和５年10月１日、小雨降る朝、学校創立150周年を迎える西小学校で、タイムカプセルが掘り出されました。これは創立100周年を記念して、昭和49年(1973)３月に「三将軍お手植えの松」の脇に埋設されたもので、記念碑も建立されています。９月に金属探知機で位置を探し出しておいた場所を掘り進めると、長辺120cm短辺90cm深さ70cmほどの大きな石棺が現れ、厚さ約10cmの重い石の蓋を持ち上げると金属製のカプセルが置かれていました。

体育館に運び入れ、開けてみると、教科書や新聞、漫画雑誌、学用品、日用品など、50年前の学校生活や社会の様子が目の前に浮かんでくるような品物がぎっしり詰まっていました。ところが、「桐生第一高校夏の甲子園大会優勝」の大見出しがついた新聞や号外も混じっています。平成11年(1999)８月21日の記事です。探してみると、他にも24～25年前の品物が入っていました。50年前のカプセルの中にどうして？

その謎を解く鍵は記念碑の碑文に刻まれていました。「百周年の礎　カプセルを埋設せり　四半世紀毎に展開を希う」と。取り出されたものをよく調べると、埋設後25周年に当たる平成10年(1998)10月12日に一度開けて、翌年再び埋めた記録が入っていました。しかし、そのことは学校日誌や沿革誌にも記録されておらず、50年前の埋設時に関わった人たちを中心に組織された、タイムカプセル開示推進協議会の関係者のみで行われたようでした。ただ、このときに大里元教育資料室長が立ち会っており、発掘直後の第２回教育資料展でカプセルの品々を展示したことが、『教育資料室のあゆみ』に書かれていました。大里元室長がご存命であれば、もう少し詳しい経緯を伺えたのかもしれません。

西小創立150周年記念
100周年タイムカプセル展　令和6年2月

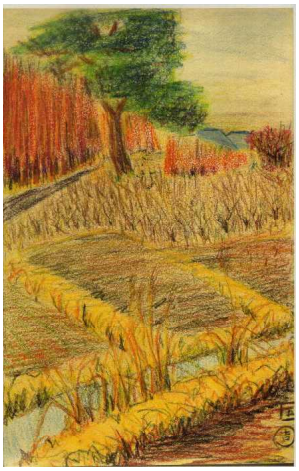
今回掘り出され展示された品々は、今後は校舎内に保管されることになりました。そして今、新しいカプセルが準備され、25年後の開封の時を待ちます。　［西小学校長談話をもとに構成］

☆参考　桐生タイムス　2023.9.15　10.2　12.29　2024.1.17

大正時代の全国児童画展覧会　境野小学校

今から100年前の大正13年(1924)、境野小学校(長島織吉校長)が、全国に呼びかけて児童画を集め、展覧会を開きました。遠く北海道や沖縄、かつて日本領だった樺太や台湾、朝鮮からも多くの作品が寄せられ、その数は数千点にも及んだと伝えられます。この展覧会開催に至ったエピソードが、日本画家として活躍した新井慈雲氏がまとめた『そのころ長島先生　思い出』という冊子に書かれています。簡単にまとめると･･･関東大震災に遭い桐生で過ごしていた慈雲氏が、恩師である長島校長に児童や教師相手に絵画指導や講習を頼まれた。１年余りが過ぎた頃。子供たちの絵が上達してきたので、全国のレベルと比較してみたくなり、周囲の先生たちと話をしていたら、長島校長に「思いきってやってみろ」と言われた、校長は村から予算50円を工面し、全国に呼びかけて絵画を募集する道筋も与えてくれた。

この時の入賞作品は、時同じくして建立された奉安殿に収められ、加えて長島校長が退官したときに寄贈した桐箱に保管されていたために、散逸せずに残ります。そして、平成９年(1997)に郷土資料展示ホールで「いま甦る73年前の児童画展」として再び展覧会が開催されました。その記憶は時間とともに薄れ、原画は境野小に戻され校内にあることは確かでしたが、在処が分からずにいました。ところが、新聞取材がきっかけで、郷土資料室内の新井慈雲氏が装飾を施した桐箱を開けたところ、そこに入っていました。これもまた150周年が取り結んだ縁だったのでしょうか。写真の絵は平成９年の展覧会のときにコピーされたもので、当室が所蔵しています。



境野尋常高等小　５年　↑
←東京麻布東町尋常小　６年

［境野小学校長談話及び桐生市教育資料室所蔵資料をもとに構成］

☆参考　桐生タイムス　1996.8.29
『学びのモノがたりNo.71(2023.8.23)』
『　　同　　No.72(2023.9.13)』